

玉名市文化財調査報告 第43集

# 高岡原遺跡Ⅱ

玉名市山田における分譲地進入路造成工事に伴う文化財調査報告書

平成31年(2019)年3月

玉名市教育委員会

# 序 文

玉名市は、熊本県北部の菊池川下流域に位置しており、旧石器時代からの長い歴史を持ち、豊富な文化財が所在する地域です。九州新幹線が開通して8年目を迎え、政治経済、教育文化、観光の中心としてさらなる発展を遂げようとしています。

このような中で玉名市教育委員会では、様々な開発事業と発掘調査の円滑な調整のため、埋蔵文化財保護行政の充実に努めているところです。また、その成果の公開、活用を通じて広く教育、文化の発展に寄与できればと考えております。

本書は住宅分譲地進入路造成工事に伴う高岡原遺跡の調査成果をまとめたものです。本書が市民の方々の文化財に対する理解の一助となり、また学術研究にも広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査並びに報告書作成にあたっては、各方面で多くの方々に多大なご理解とご協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成 31 年 3 月 27 日

玉名市教育委員会  
教育長 池田 誠一

# 例 言

1. 本書は、玉名市教育委員会が平成29年度に実施した玉名市山田所在の高岡原遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、玉名市教育委員会文化課が実施し、田熊秀幸が担当し、齋父雅史と石松 直が補助を行った。
3. 出土遺物の実測は、菊池直樹が行い、製図は江見恵留・菊池が行った。
4. 本書に掲載した写真の撮影は、田熊が担当し、齋父と石松が補助を行った。
5. 整理作業は玉名市文化財整理室で行った。
6. 出土遺物は、玉名市文化財整理室で保管している。
7. 本書の編集及び執筆は玉名市教育委員会で行い、田熊が担当し、菊池が補助を行った。

# 本文目次

序文	
例言	
本文目次	
挿図目次	
写真・図版目次	
表目次	
I 遺跡の位置と環境	
I-1 地理的環境	1
I-2 歴史的環境	1
II 調査の概要	
II-1 調査に至る経緯	2
II-2 調査の計画と実施	2
II-3 調査組織	3
III 調査の成果	
III-1 基本層序	3
III-2 検出遺構・遺物	3
IV 総括	12
報告書抄録	

# 挿図目次

第1図 高岡原遺跡の位置と過去の調査範囲	1	第15図 S06 平面・断面図	9
第2図 高岡原遺跡遺構配置図	3	第16図 S06 出土遺物実測図	9
第3図 調査区西壁断面図	4	第17図 S07 平面・断面図	10
第4図 S 01 平面・断面図	5	第18図 S07 出土遺物実測図	10
第5図 S 01 竈遺構平面・断面図	5	第19図 S08 平面・断面図	10
第6図 S 01 出土遺物実測図	5	第20図 S08 出土遺物実測図	10
第7図 S 02 平面・断面図	6	第21図 S09 平面・断面図	11
第8図 S 02 出土遺物実測図	6	第22図 S09 出土遺物実測図	11
第9図 S 03 平面・断面図	7	第23図 S13 平面・断面図	12
第10図 S 03 出土遺物実測図	7	第24図 S14 平面・断面図	13
第11図 S 04 断面図	8	第25図 S14 出土遺物実測図	13
第12図 S 04 出土遺物実測図	8	第26図 P24 断面図	13
第13図 S 05 平面・断面図	9	第27図 P24 出土遺物実測図	13
第14図 S 05 出土遺物実測図	9		

# 写真目次

写真1 重機による表土掘削作業	2	写真4 高岡原遺跡調査状況2	15
写真2 遺構検出作業	2	写真5 高岡原遺跡調査状況3	16
写真3 高岡原遺跡調査状況1	14	写真6 高岡原遺跡調査状況4	17

# 表目次

第1表 高岡原遺跡遺物観察表（土器類1）	18	第3表 高岡原遺跡遺物観察表（土器類3）	20
第2表 高岡原遺跡遺物観察表（土器類2）	19	第4表 高岡原遺跡遺物観察表（石器類）	20

I 遺跡の位置と環境

I-1 地理的環境

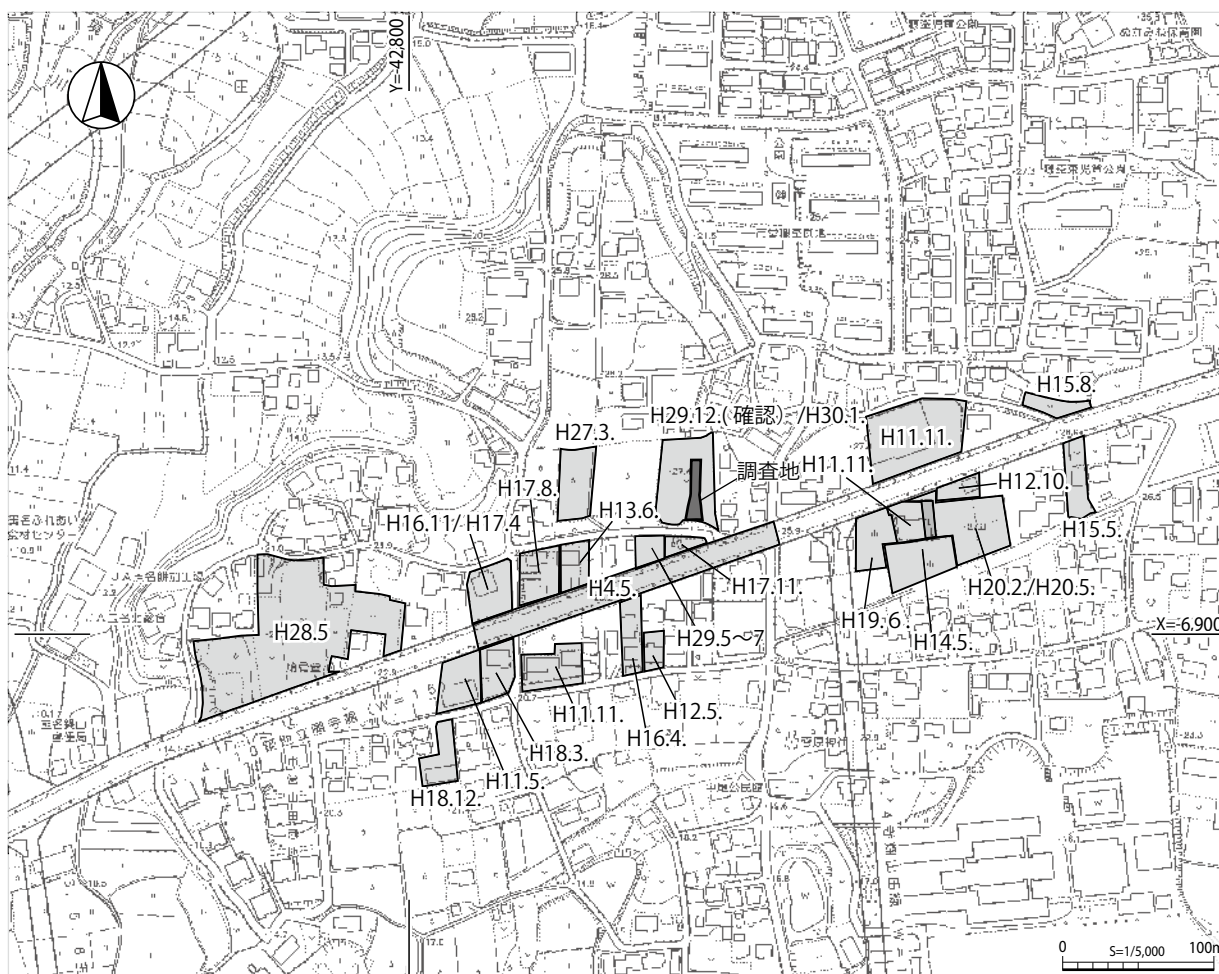
遺跡が所在する山田地区は筑肥山地南東端に位置する標高501.4mの筒ヶ岳を主峰とする小岱山地の南縁に形成された段丘である玉名台地とそれが最終氷期頃に開析されのちに完新世温暖期に堆積物により埋積された境川の谷底平野からなる。本地域の地形は開析谷、谷底平野、段丘である。谷底平野と段丘との境界には急崖がみられるが、それぞれの地形内では比較的平坦であり、境川もあり水利がよいため、古くから人の活動の場となってきている。高度成長期以前は台地上の耕作地と中近世景観をよく残した村落が残存する地域あったが、市道立願寺築地線の整備の後に開発が活発となり、宅地化が進んでいる。

調査対象地は、玉名台地上にある標高約27m

の地点に位置しており、高岡原遺跡の北端部に、あたる。かつては果樹園として利用されていたが、その後耕作が放棄され、現況は雑草が繁茂する荒蕪地となっている。

I-2 歴史的環境

境川の谷底平野に面した玉名台地東側の西縁に所在する高岡原遺跡は弥生時代後期を中心として縄文時代から中世にかけての遺構がみられ、弥生時代後期、古代においては集落跡であったとみられる。特に弥生時代後期には、拠点集落であったと考えられる。西側には中世城館が所在し、東側には縄文時代の遺構がみられる区域もある。また古代には立願寺周辺から続く集落の一部が及んだとみられる。高岡原遺跡は平成4年の築地立願寺線建設に伴う調査から始まり、これまでに数多くの調査がなされてきた。平成4年の調査では、24基の住居跡と共に



第1図 高岡原遺跡の調査位置 (H29.1) と過去の調査範囲

後漢鏡(破鏡)や小型仿製鏡などが出土している。現在鉄塔が建っている南側隣地は平成17年度に発掘調査を実施しており、弥生時代の住居跡が数基確認され、土器と共に袋状鉄斧などが出土している。平成29年度には今回の調査区に加えて、南西側の地点でも調査を行っており、弥生時代後期末を中心とした遺構が確認され、土器と共に袋状鉄斧、鉈などの鉄器が出土している。これらの調査から一帯は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落が形成されていたと考えられる。遺跡範囲の西端は中世の「高岡屋敷」と伝えられており、平成28年度に実施した大型店舗建設に伴う調査では、中世の掘立柱建物6棟、溝状遺構1条などが検出され、14世紀～16世紀代の青白磁・瓦器などが出土している。

## II 調査の概要

### II-1 調査に至る経緯

本調査は、玉名市山田字高岡原1996-14において、分譲地進入路造成工事が計画されたことに起因する。事業計画地の一部は、周知の埋蔵文化財包蔵地「高岡原遺跡」の範囲内に所在していたため、平成29年12月7日～8日にかけて、計画地内において確認調査を実施した。その結果、計画地内の全域にわたって、古代の溝状遺構及び、弥生時代とみられる竪穴住居群が確認された。遺構が確認された範囲は、造成によって2～5mの掘削が予定されており、計画変更による埋蔵文化財の保存も不可能であったため、平成30年1月10日に追加の確認調査を実施し、工事が埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲を確定した。その結果、地下遺構が損壊される範囲(287㎡)を対象に調査を実施し、遺跡の記録保存を行うこととなった。

### II-2 調査の計画と実施

事業主体者は、文化財保護法第93条第1項の規定に基づき、平成29年11月28日付で埋蔵文化財

発掘の届出を行い、熊本県教育委員会より、施行に先立ち発掘調査を実施すべき旨の指導が通知された(平成30年2月2日付教文第2470号)。これを受けた事業主体者からの委託を受け、平成29年度事業として、本発掘調査を実施することとなった。

調査は、表土から調査対象となる遺構検出面までは、株式会社共和建設提供の重機により掘削を行い、それ以降の包含層掘削、遺構検出及び掘削作業、記録作業は人力によって行った。遺構分布状況及び土層堆積状況、個別遺構記録については、実測図面及び写真による記録を行った。

重機による表土掘削は平成30年1月30日から開始し、2月1日からは作業員による人力掘削作業に入った。2月1日に全体検出作業を行い、同日から溝状遺構S04の掘削を開始した。爾後、竪穴住居、掘立柱建物等の遺構掘削を順次行い、写真撮影、遺物の取り上げ、図面作成、3D測量等を行い、2月22日に全ての遺構を完掘し、完掘状況写真を撮影した後、現地での全作業を終了した。



写真1 重機による表土掘削作業



写真2 遺構検出作業

II-3 調査組織

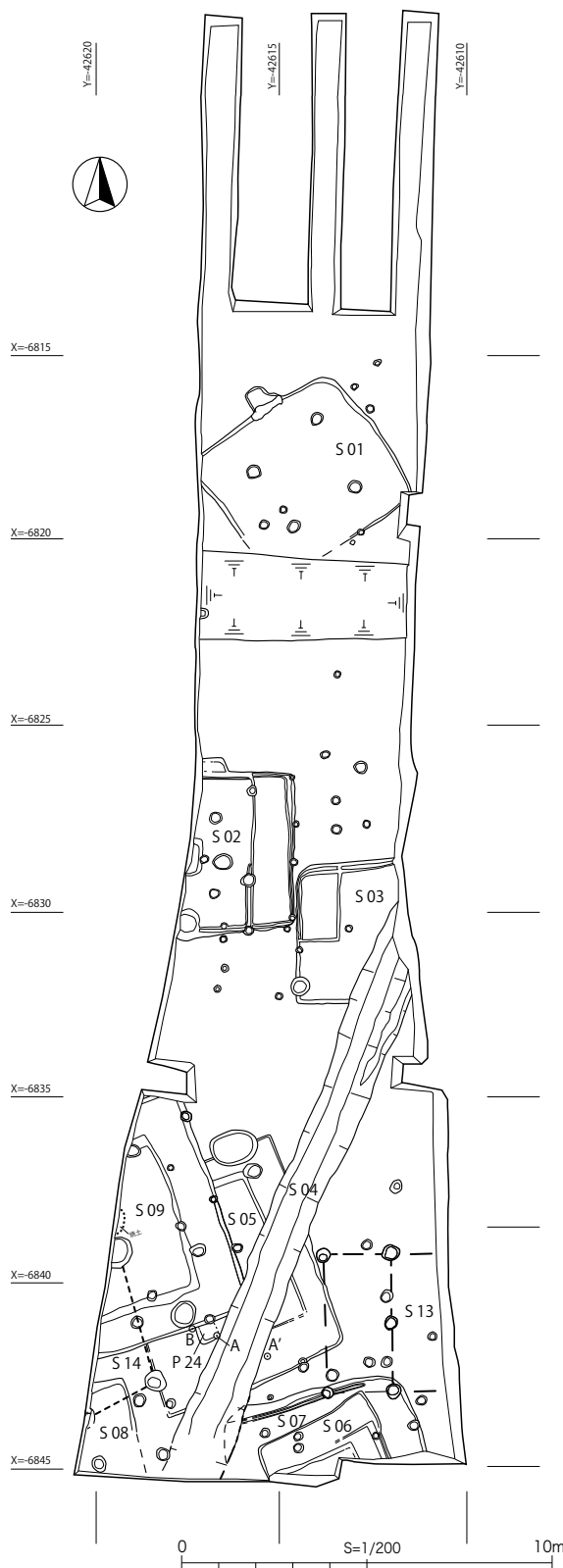
平成29年度に発掘調査、平成30年度に報告書作成を下記の体制により実施した。

- 調査主体 玉名市教育委員会  
 調査責任 教育長 池田誠一  
 調査統括 教育部長 戸寄孝司  
           文化課長 竹田宏司(平成29年度)  
           文化課長 松田智文(平成30年度)  
           文化課長補佐兼文化係長 兵谷有利  
 庶務担当 文化財係長 田中康雄  
 調査協力 水植條次郎 共和建設株式会社  
 調査担当 技師 田熊秀幸(確認・発掘調査)  
           主査 菊池直樹(報告書作成)  
 発掘作業員 岩井光男、大村孝憲、片山昭義  
           北原靖治、高谷健也、塚本廣二  
           寺本涼子、村上厚生  
 整理作業員 尾崎延枝、五野富美子、坂崎郷子  
           早川イツエ

III 調査の成果

III-1 基本層序

調査対象地の基本層序はⅠ～Ⅴ層に大別できる。Ⅰ層は表土で、耕作による著しい攪乱を受けており、現代の陶磁器片と少量の土師器片が混入している。Ⅱ層は褐色の埴壤土で、果樹園を造成に伴う造成土である。Ⅲ層は中粒砂を多く含む埴土であり、近世以降に二段階にわたって北から南へ押しだしている(Ⅲa・Ⅲb)。いずれもⅣ層は黒褐色の粘性土で構成された須恵器片や土師器片などを多く含む古代の包含層であり、調査地南半のみで確認された。Ⅴ層は褐色の粘性土で構成された基盤土である。調査区北半は近世以降の削平により、弥生～古代の遺構が同一面上から検出されている。遺構検出面はⅤ層上面である。基盤土は北から南へ傾斜しており、南半部のみ、その上に古代の遺物包含層が広がっている。検出遺構は、溝状遺構1条、竪穴住居8棟、柱穴8基、柱穴から復元される掘立柱建物2棟である。以下、主な遺構について詳述する。



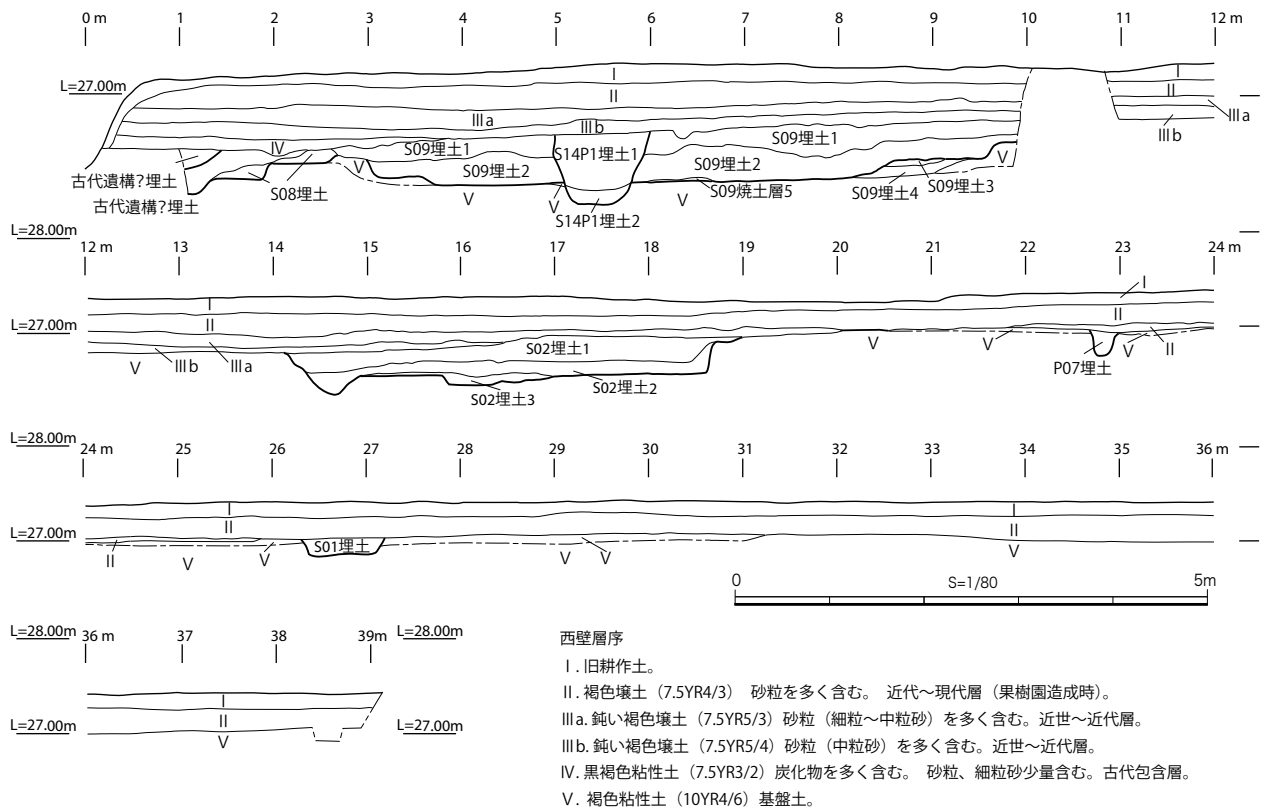
第2図 高岡原遺跡遺構配置図

III-2 検出遺構・遺物

S01(竪穴住居:古墳時代後期)【第4・5・6図】

調査区内において、唯一全形を確認し得た竪穴住居である。平面プランは長辺4.9m、短辺4.3mの

### III 調査の成果



第3図 調査区西壁断面図

ほぼ正方形を呈する。主軸は35度東に振る。近世以降に著しい削平を受け、残存深度は9.8cmと浅いが、全面にわたって張床面が残存しており、床面直上から、小型の坏身、坏蓋など、7世紀代前半の遺物が出土した。支柱穴は4基であり、住居の北側壁には、竈状遺構が配されている。竈状遺構は住居から外側に70cmほど突出しており、住居側に竈本体の一部が残る。遺物は1～4を図化した。1は坏身であり、2はつまみ付の坏蓋である。いずれも小型であり7世紀前半のものであるとみられる。3は土師器の坏で、4は甕であり、同時期のものである。

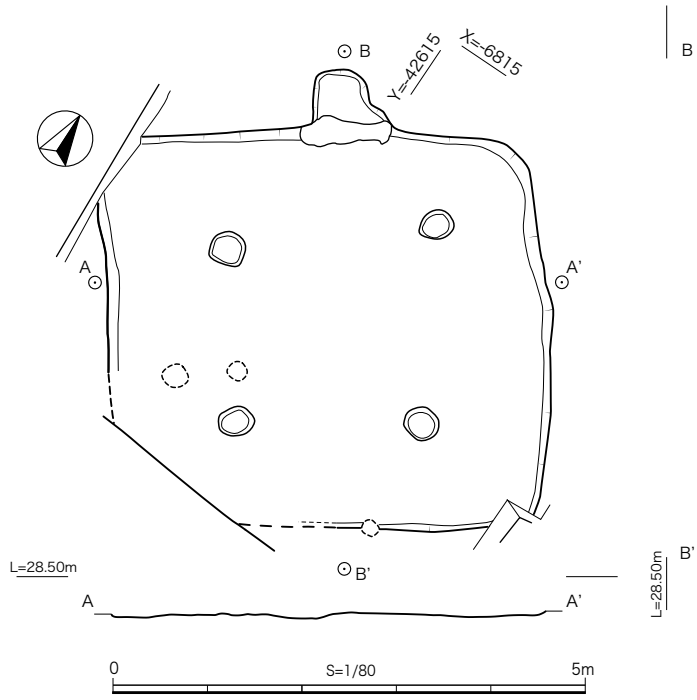
#### S 02 (竪穴住居：弥生時代後期)【第7・8図】

調査区中央に2棟並んで検出された竪穴住居で、南北方向3.0m、東西方向検出長4.4m、深度0.5mを測る。ほぼ南北方向を向いており、東に隣接するS03と同一の方向軸をとる。切合わないことから、同時期に機能していた可能性も考えられる。支柱穴は2基確認でき、中央に炉跡状遺構1基、南側壁に沿って住居内土坑1基、東側にはベッド状遺構を配している。また、全周に周壁

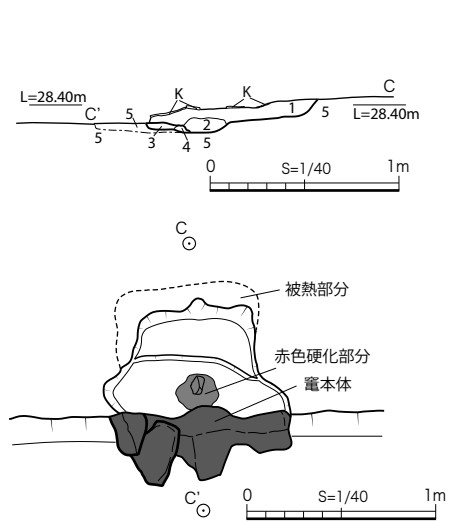
溝を設けている。遺物は5～10を図化した。5は甕である。6,7は高杯である。住居内土坑からは、完形の弥生土器・鉢(8)が出土している。9,10は黒曜石製の石器で、9は使用痕のある縦長剥片であり、10は石匙様石器の基部である。石器については縄文時代の遺物の混入の可能性も残る。廃絶期は遺物から弥生時代後期と考えられる。

#### S 03 (竪穴住居：弥生時代後期)【第9・10図】

調査区中央に2棟並んで検出された竪穴住居で、南北方向2.8m、東西方向検出長4.0m、深度0.4mを測る。西に隣接するS02と同一の方向軸をとり、切合関係を持たない。明確な支柱穴はなく、北側壁に沿ってベッド状遺構を配し、全体的に張床を施している。また、床面全域にわたって焼土と硬化面が広がっており、火災による焼失住居である可能性が考えられる。出土遺物は小片が主であり、短時間における住居の放棄を想定しがたい。出土遺物は11～13を図化した。11は甕の口縁部であり、やや外反し、縁は



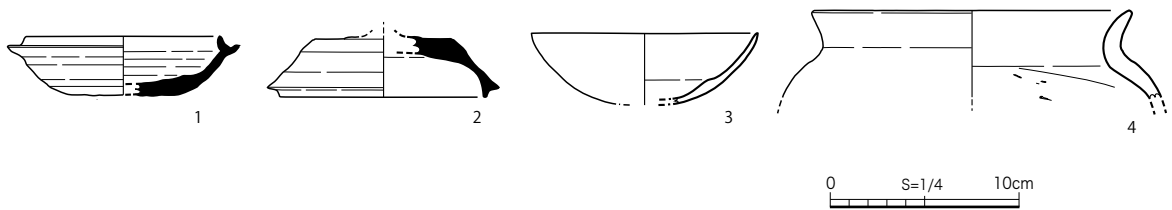
第4図 S01平面・断面図



竈部断面図土層注記

- K. (竈片) 灰白シルト (10YR8/1) しまりあり、細粒砂混入。  
 1. 灰褐色シルト (7.5YR4/2) 焼土・炭化物・土器片混じる。ややしまる。  
 2. 明赤褐色シルト (2.5YR5/6) 焼土層、赤変、粘性あり。  
 3. 灰褐色シルト (7.5YR4/2) と黄褐色シルト (10YR5/6) のブロック土。しまりあり。竈本体  
 4. 灰褐色シルト (7.5YR4/2) と明赤褐色シルト (2.5YR5/6) のブロック土。竈本体

第5図 S01竈遺構平面・断面図



第6図 S01出土遺物実測図

丸い。12、13は高杯の脚部である。ベッド状遺構の形態と甕の特徴から弥生後期中葉頃までには廃絶されたとみられる。

S04(溝状遺構:古代)【第11・12図】

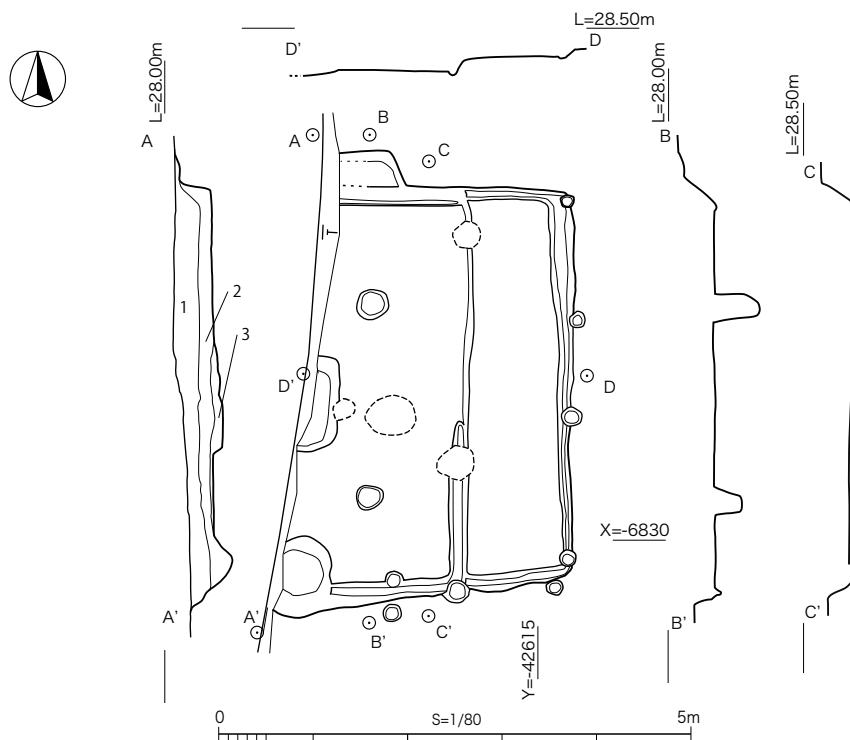
調査区を南北に縦断する溝状遺構である。長軸は東に22度振り、検出長は16.1mを測る。断面は逆台形を呈し、上面幅1.5～1.0m、底面幅0.7～0.4m、深度0.5mを図る。埋土は2段階に分かれており、下層からは須恵器、土師器とともに古代瓦が検出された。区画溝として利用されたとみられる。同時期の溝状遺構は、南側隣接地(山田2041-3)調査時にも確認されており、今回検出された溝はこれに続くものとみられる。溝であるため遺物の時代

幅が広い。14は坏もしくは鉢の底部である。14～17は須恵器の坏であり、17には火樨がみられる。18、19は土師器の椀とみられる。20は糸切りの土師器皿である。やや時代が下がり、ピット等からの混入の可能性がある。21～23は須恵器の壺である。24は丸瓦であり、凸面は縄目で、凹面は布目がみられる。須恵器は8世紀末から9世紀前半とみられる。土師器はやや新しいものもみられ9世紀後半ごろまで延びる可能性がある。

S05(竪穴住居:弥生時代終末～古墳時代初頭)【第13・14図】

調査区南西部で検出された竪穴住居であり、長辺6.2m、短辺5.4m、深度0.5mを測る。規模は、S09

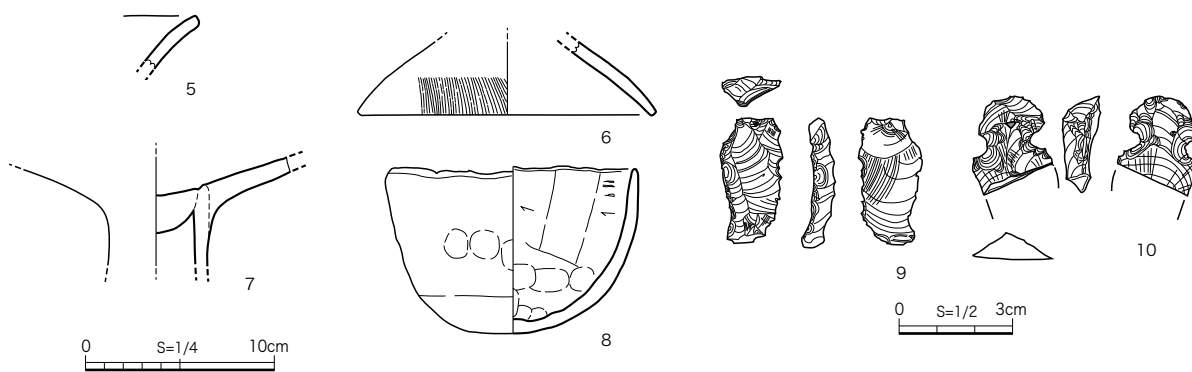




S02 土層注記

1. 褐色粘性土 (7.5YR4/3) 細～中粒砂を含む。炭化物片、粒を含む。
2. 灰褐色粘性土 (5YR4/2) 中粒砂を多く含む。炭化物を多く含む。
3. 黒褐色粘性土 (5YR3/1) 炭化物粒を多く含む。炉址。

第7図 S02 平面・断面図



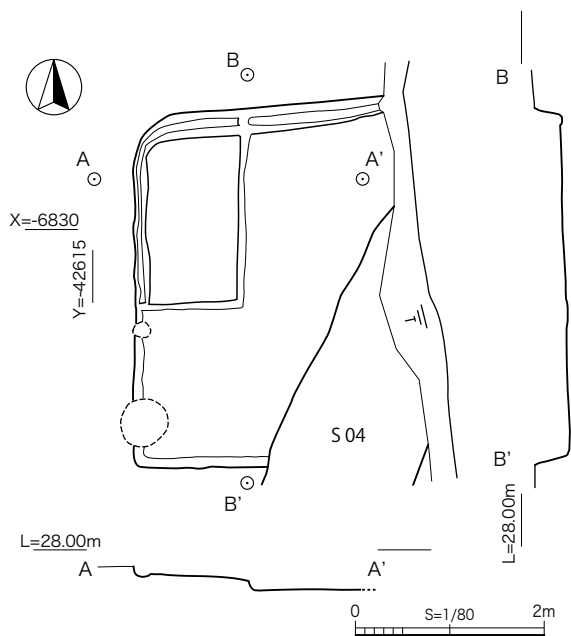
第8図 S02 出土遺物実測図 (石器は 1/2)

に並ぶ大型の建物である。南北軸は西に20度振る。S04、S09に切られる。ベッド状遺構は北、東、南の3方にみられるが、西側はS09に切られるため不明である。遺物は25、26、27が図化できた。25、26は甕であり、25は長胴丸底の甕であるとみられる。27はジョッキ型土器の底部である。出土した遺物から見て、廃絶は弥生時代終末期から古墳時代初頭であるとみられる。後述するS09は切り合い関係でS05より新しく、住居規模もほぼ同様であるが、出土遺物が

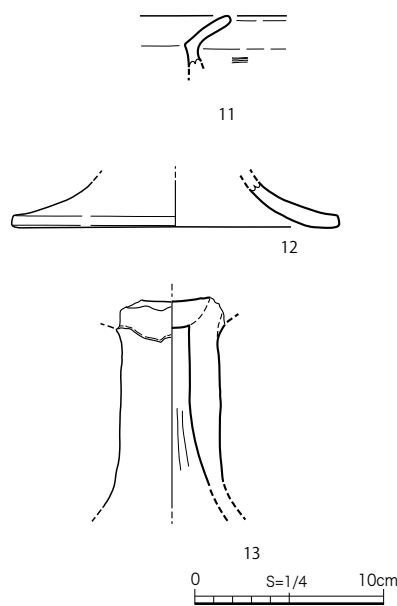
遙かに豊富である。遺物はS05とほぼ同時期であり、両者の時期差は小さいとみられる。

S06(竪穴住居:弥生時代終末～古墳時代初頭)  
【第15・16図】

調査区南端部で検出された竪穴住居であり、南北方向の検出長2.4m、東西方向3.4m、深度0.3mを測る。小型の竪穴住居であり、南北方向の軸は西に25度振る。S07を切り、S07の埋没後に造営され



第9図 S03 平面・断面図



第10図 S03 出土遺物実測図

ている。ベッド状遺構は北と東の2方にみられ、西側には無かった可能性が高い。遺構の南側は調査区外であり不明である。床面には炭化物層が認められる。遺物は少なく破片ばかりであるが、28～33を図化した。28～31は甕である。脚付(29)と長胴丸底(28)が混在している。32、33は高杯である。遺物からみて、弥生時代終末から古墳時代初頭に廃絶されたとみられる。

S07(竪穴住居:弥生時代後期)【第17・18図】

調査区南端部で検出された竪穴住居であり、南半分が調査区外に位置する。南北方向の検出長2.3m、東西方向の検出長4.7m、深度0.5mを測る。南北方向の軸は西に15度振る。また、S04、S06に切られる。ベッド状遺構は北と東の2方にみられるが、西側はS04に切られ、南側は調査区外であり不明である。北縁のみ壁溝が検出されている。遺物は少なく破片ばかりであるが、34～41を図化した。34は甕であり、外側は細めの平行のタタキ目がみられ、内面はハケで調整される。35は甕の脚である。36、37は壺である。38～40は高杯である。41は台石である。遺物からみた廃絶期は弥生時代後期であり、弥生時代後期終末のS06に切られることから終末

期までは及ばないとみられる。

S08(竪穴住居:弥生時代終末～古墳時代初頭)

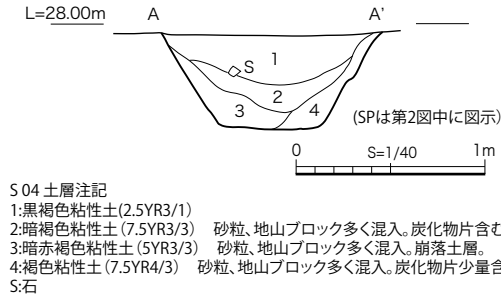
【第19・20図】

調査区南西端部で検出された竪穴住居であり、そのほとんどが調査区外に位置するため詳細は不明である。南北方向の検出長1.6m、東西方向の検出長1.6m、深度0.2mを測る。南北方向の軸は西に15度振る。遺物は少なく破片ばかりであるが、4点を図化した。42から44は甕である。42のみ長胴丸底の甕であるとみられる。45は器種は不明であるが、脚部分であるとみられる。遺物からみて廃絶は弥生時代終末から古墳時代初頭であるとみられる。

S09(竪穴住居:弥生時代終末～古墳時代初頭)

【第19・20図】

調査区南西端部で検出された竪穴住居であり、西側半分が調査区外に位置する。南北方向が6.3m、東西方向の検出長4.7m、深度0.3mを測る。今回の調査区内で最大のサイズの竪穴住居であり、南北方向の軸は西に19度振る。S04に切られ、S05を切る。ベッド状遺構は北、東、南の3方にみられるが、西側は調査区外であり不明である。中央には焼土がみら



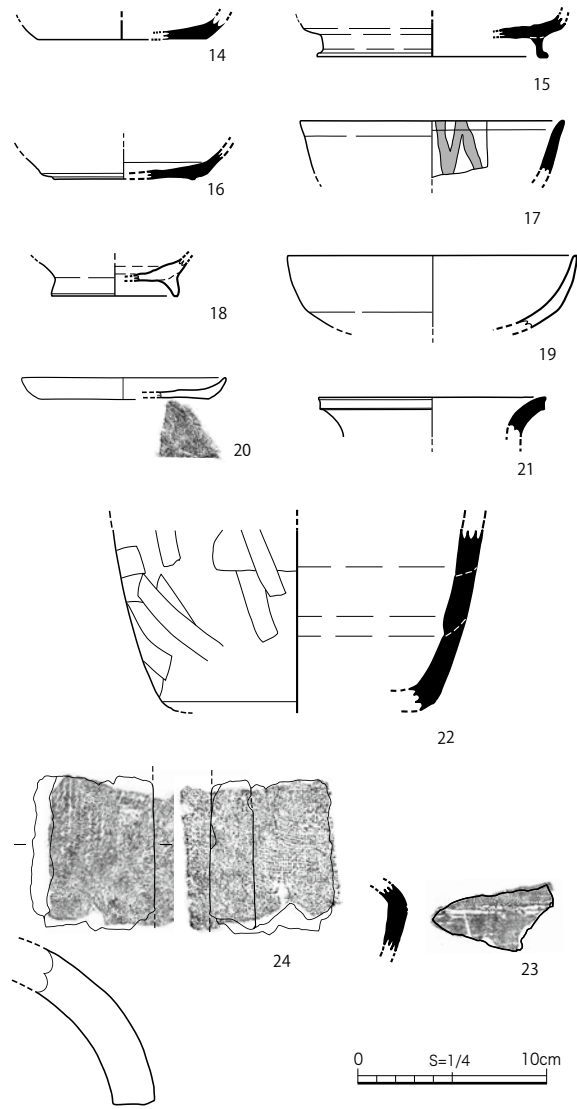
第11図 S04 断面図

れ、炉があった可能性がある。壁際にみられる小ピットは建物に関連する可能性が高い。出土遺物は比較的多く、遺物は46～58の13点を図化した。46～49は甕であり、46、47が脚付で、48、49が長胴丸底である。50～52は壺であり、短頸壺(50)は器壁が非常に薄い。53～55は高杯である。56は胎土が赤色を呈する直口の鉢であるが、作りは丁寧で、表面はハケ目による凝った調整がなされている。57は口縁が外反する鉢である。58は手づくねの鉢である。

甕の形態からみて弥生時代終末から古墳時代初頭に廃絶された住居であるとみられる。この住居はS05を切るが、双方の遺物からみた時期差はほぼ無いとみられ、両遺構の時期差は小さいとみられる。

S13(掘立柱建物:古代) 【第139図】

調査区南部で検出された掘立柱建物跡であり、検出された柱穴は5基である。東側に3基南北に並び、西側に2基南北に並ぶ。建物跡の東側は調査区外であるため正確な建物プランについては不明である。柱穴の形状は円形をなし、径0.3m程度である。削平をうけており、ピットの深さは0.3～0.4m程度である。建物規模は検出部分では東西1間×南北2間であるが、さらに東方向に調査区外に延長するとみられる。現況では南北3.8m、東西3.4mを測る。建物の長軸は南北方向に沿う。出土遺物は無く、遺構形成・廃絶期に関わる遺物は確認できなかった。遺構の特徴からみて中世の掘立柱建物である可能性が高い。

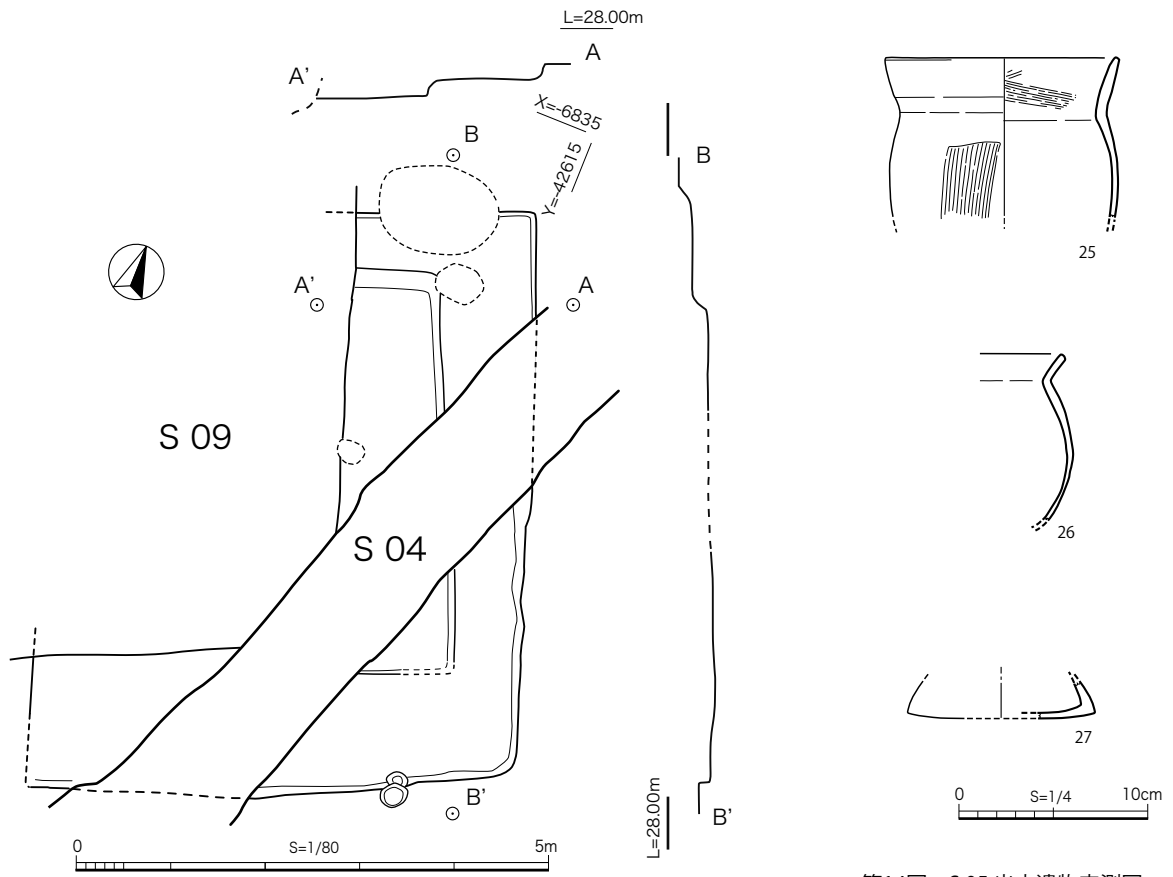


第12図 S04 出土遺物実測図

S14(掘立柱建物:古代) 【第24・25図】

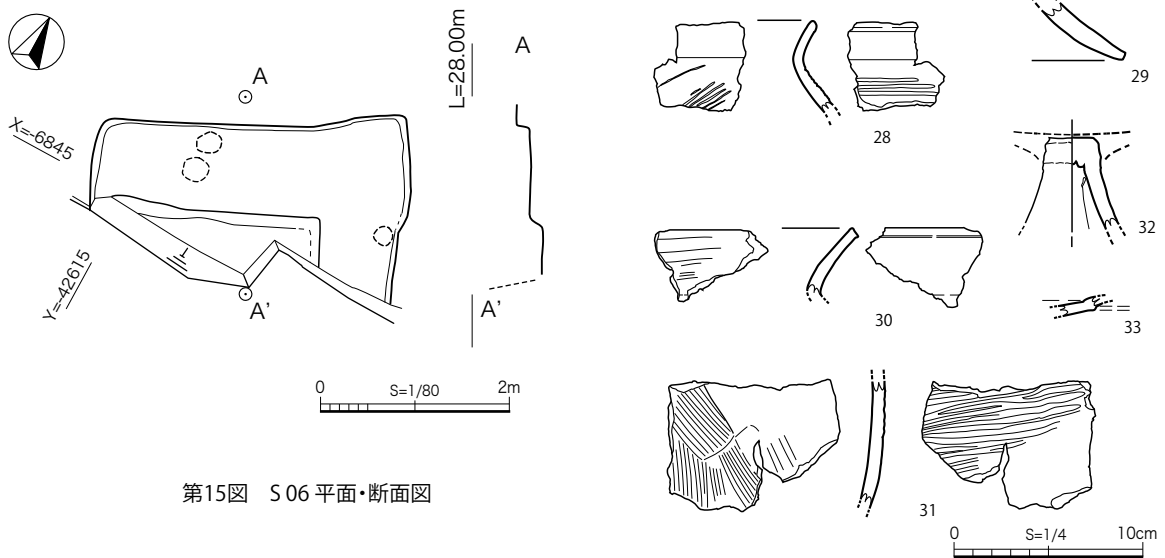
調査区南西端部で検出された掘立柱建物跡であり、検出された柱穴は3基である。建物跡の東側は調査区外であるため正確な建物プランについては不明である。柱穴の形状は円形をなし、径0.6～0.8m程度である。削平をうけており、ピットの深さは0.3～0.4m程度である。建物規模は検出部分では東西1間×南北1間であるが、さらに西にむけて調査区外に延長するとみられる。現況では南北3.7m、東西2mを測る。建物の南北軸は西に15度振る。廃絶時に柱は掘抜かれたとみられ柱痕はみられず、柱穴からは多くの遺物が出土した。遺物はP1(61、62、70)とP2(57～60、63～69、71)から出土している。

III 調査の成果



第14図 S05 出土遺物実測図

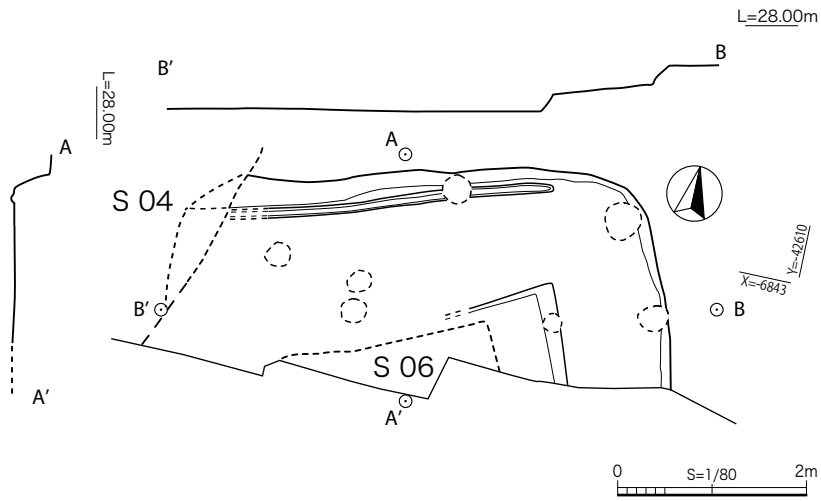
第13図 S05 平面・断面図



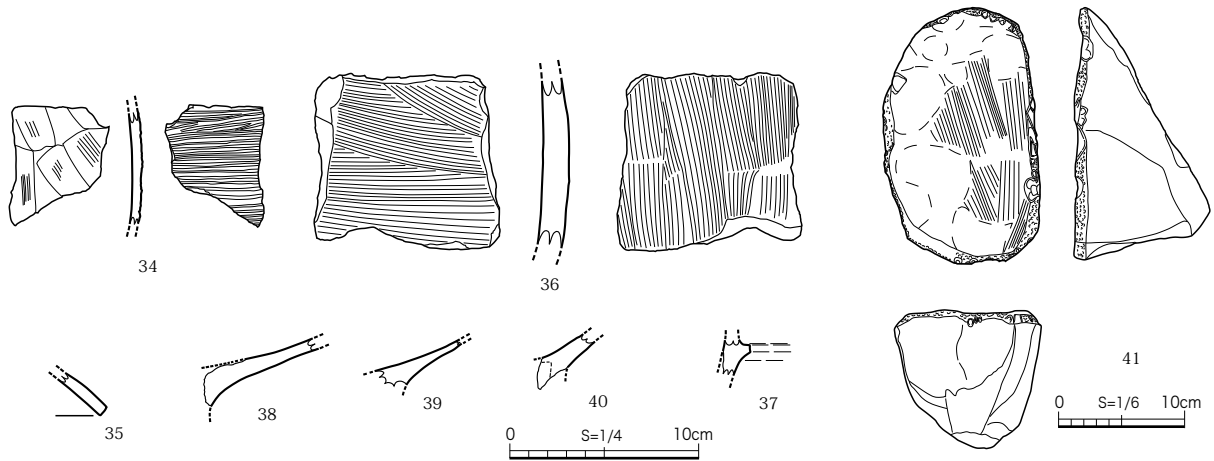
第15図 S06 平面・断面図

第16図 S06 出土遺物実測図

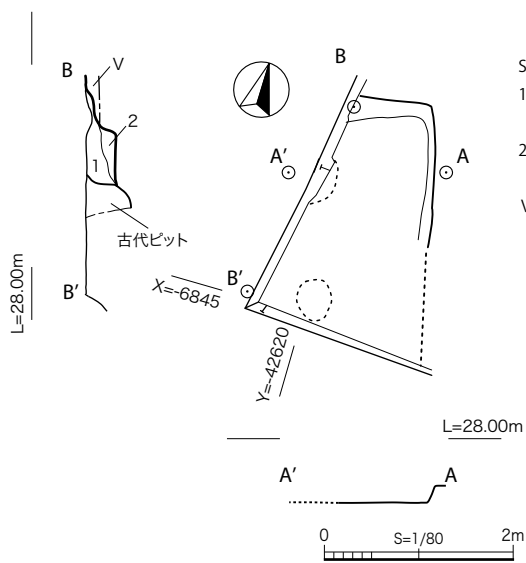
III 調査の成果



第17図 S07 平面・断面図



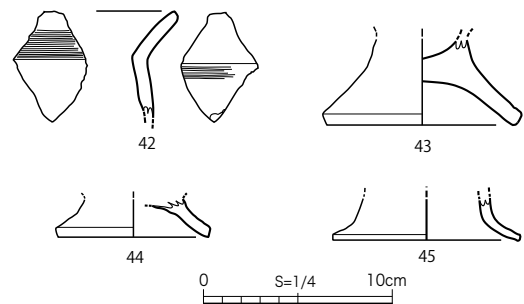
第18図 S07 出土遺物実測図(41のみ1/6)



第19図 S08 平面・断面図

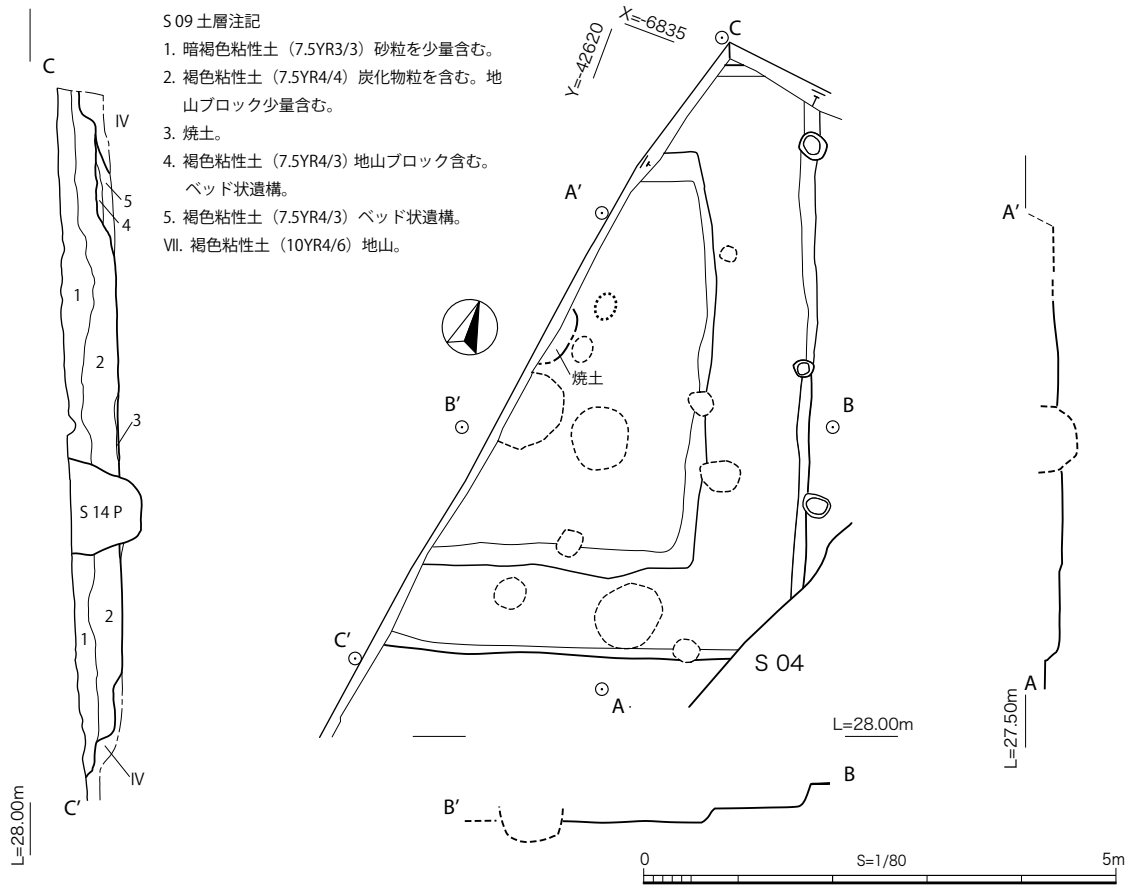
S08 土層注記

- 1: 黒褐色粘性土 (7.5YR3/2) 炭化物粒子を少量、細粒砂を多く含む。V層由来。古代の土壌埋土か？
- 2: 暗褐色粘性土 (7.5YR3/3) 炭化物粒子を多く含む、地山ブロック(中)を少量含む。S08埋土。
- V: 黄褐色褐色土 (10YR4/6) 地山

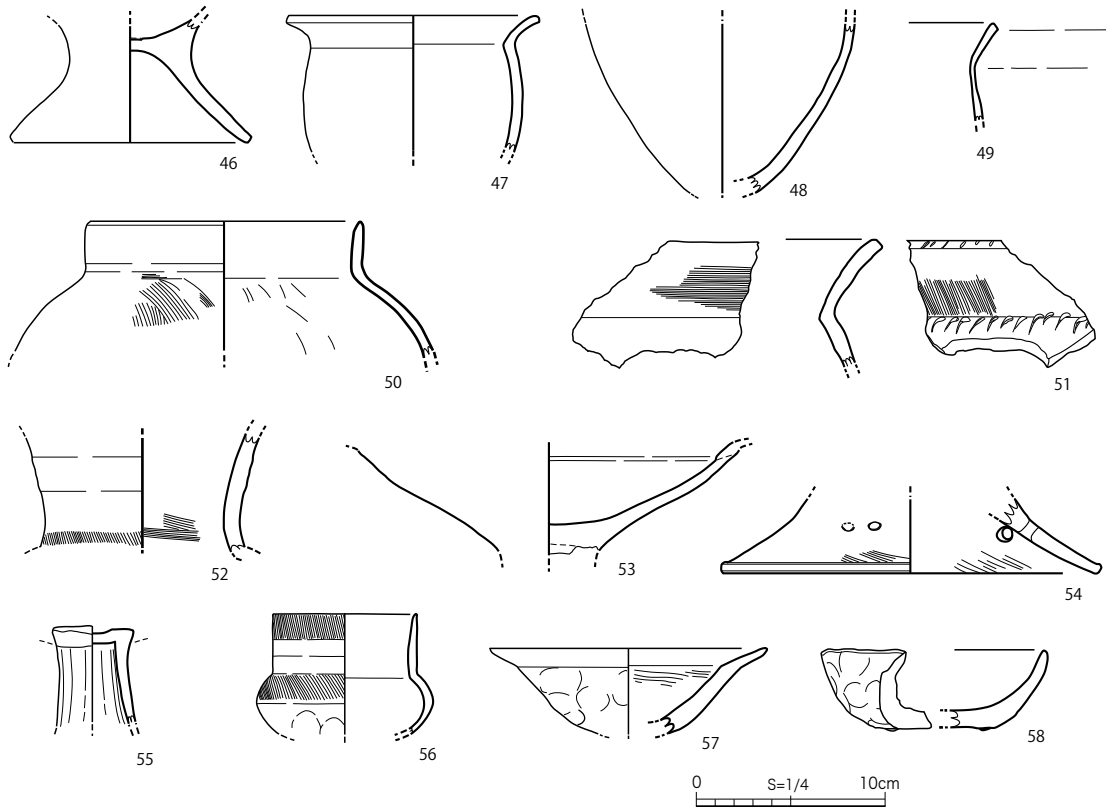


第20図 S08 出土遺物実測図

III 調査の成果



第21図 S09 平面・断面図



第22図 S09 出土遺物実測図

59～62は須恵器の坏であり、63、64は須恵器の坏もしくは椀である。65は須恵器の皿である。66は須恵器の壺である。67は土師器の椀である。68は内黒の黒色土器の坏であり、69～71は内黒の黒色土器の椀である。72は須恵器の鉢であり、火襷がみられる。73は須恵器の大甕である。須恵器は9世紀前半から中葉頃のものであり、土師器と内黒の黒色土器は9世紀後半に及ぶとみられる。従って廃絶期は9世紀後半の可能性が高い。

#### P 24(土壇:弥生時代後期)【第26・27図】

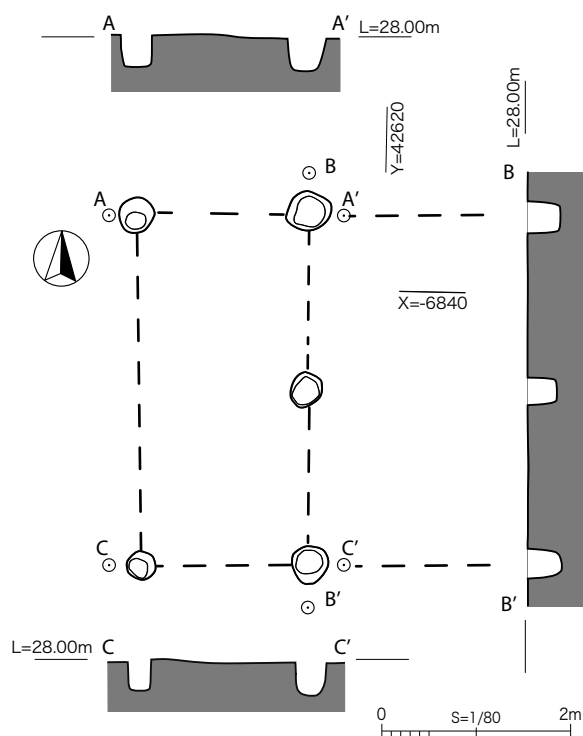
S09の南東端に位置する方形の土壇である。砥石(74)が出土している。74は弥生時代後期頃の砥石であるとみられる。凹みに鉄錆がみられることから鉄器の研磨に使用されたとみられる。

#### IV 総括

発掘調査の結果、調査区からは弥生時代から古代にかけての集落跡を確認できた。発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居8棟、溝状遺構1条、柱穴8基、柱穴から復元可能な掘立柱建物2棟である。また、遺物包含層および遺構埋土からは、弥生土器・土師器・須恵器などコンテナ6箱分の遺物が出土した。本発掘調査において確認された成果について、時代順に詳述する。

弥生時代の遺構は出土遺物からみて、弥生時代後期から古墳時代初頭におよぶものであり、集落の形成時期はこの頃を上限とする。南側隣接地において確認された竪穴住居群は弥生時代終末に留まるもので、古墳時代初頭に及ばない。集落内においても時期によって利用された空間が異なるとみられる。

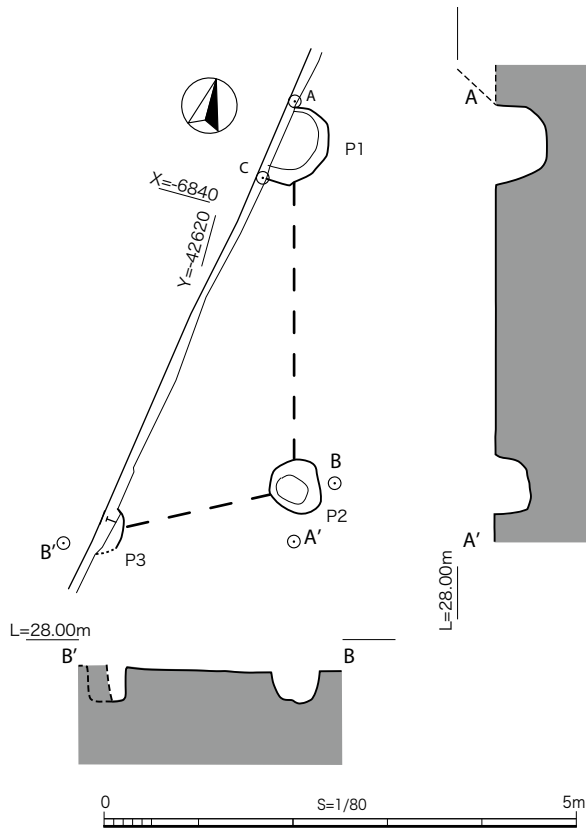
古墳時代前期から中期の遺構は認められないが、S01で竈を有する古墳時代の竪穴住居を確認できた。従前までは、高岡原遺跡において同時代の竪穴住居は認められていなかったが、今回の調査で、古墳時代においても集落が営まれていた証左を得た。周辺には糠峰古墳などの古墳が造営されており、その母集団との関係が考えられる。



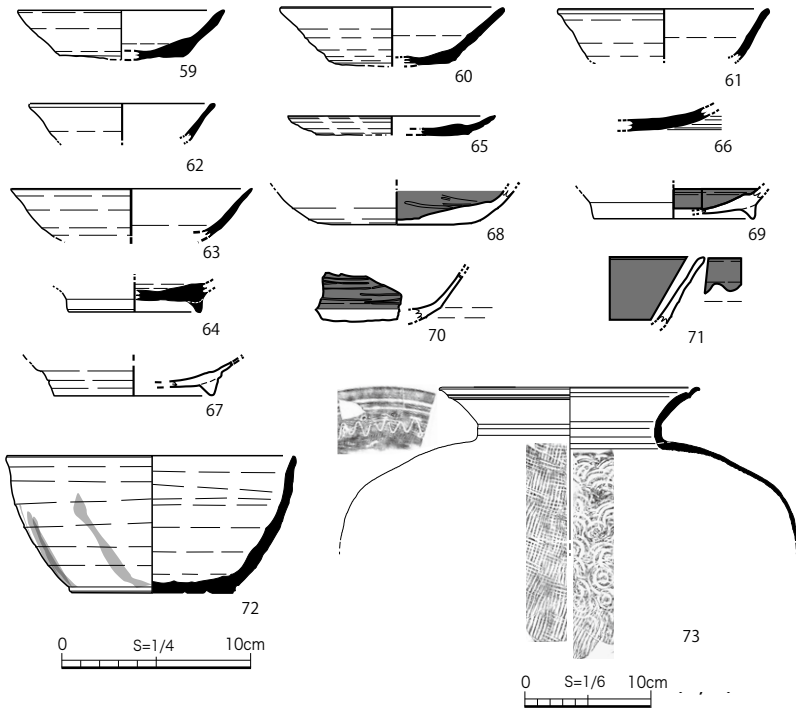
第23図 S13 平面・断面図

古代には調査区を南北に縦断する溝S04が掘削され、区画溝として機能したとみられる。溝の埋土中からは古代の布目瓦が出土しており、付近に郡衙関連の施設が存在した可能性も考えられるが、周辺の調査を含め明確な施設を確認できておらず、推測の域を出ない。古代の遺構として掘立柱建物S14があるが、よく類似した須恵器甕が出土するが接合はしなかった。また出土遺物は溝S04より若干時代が下るようであり、両者の方向軸が一致しないことも含めて、溝S04のほうが一段古いようである。

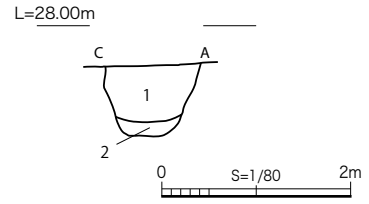
古代以降、明確な集落形成は行われなくなるが、掘立柱建物S13が検出されているほか、中世の土師器を含むピットが検出されている。以後は近世の造成を経て、居住地以外の土地利用として、耕作地または空閑地になっていたとみられる。



第24図 S 14 平面・断面図



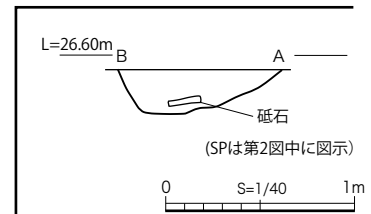
第25図 S 14 出土遺物実測図(73のみ1/6)



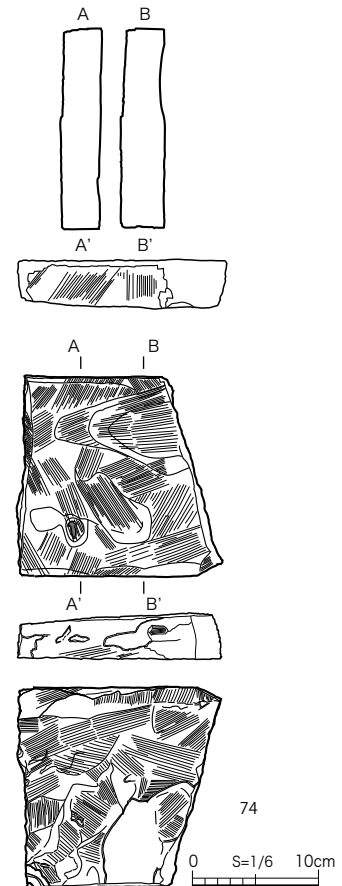
S 14 P1 断面図

S 14 P1 土層注記

1. 黒褐色粘性土 (7.5YR3/2) 地山ブロック、炭化物を少量含む
2. 黒褐色粘性土 (7.5YR3/1) 地山ブロックを少量含む。



第26図 P 24 断面図



第27図 P 24 出土遺物実測図



写真3 高岡原遺跡調査状況1



調査区南部遺構検出状況(北西から)



調査区北部遺構確認状況(北から)



調査区北部遺構完掘状況(北から)



調査区南部遺構掘削状況(南東から)



調査区南部遺構掘削状況(南から)



S01竈付竪穴住居掘削状況(西から)

写真4 高岡原遺跡調査状況2



S01 竈跡掘削状況(北東から)



S02 竪穴住居掘削状況(東から)



S02 竪穴住居内土壙遺物出土状況(西から)



S03 竪穴住居掘削状況(西から)

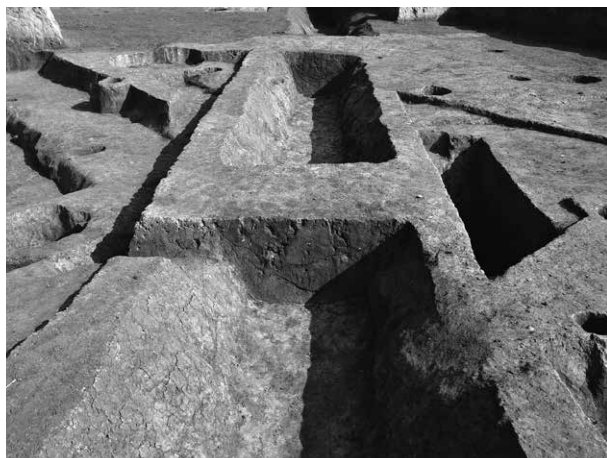


S02, S03 遺構掘削状況(北西から)



S04 遺構掘削状況(南西から)

写真5 高岡原遺跡調査状況3



S04 溝断面(南から)



S05 竪穴住居掘削状況(西から)



S06 竪穴住居掘削状況(北東から)



S06竪穴住居, S07 竪穴住居掘削状況(南西から)



S09 竪穴住居とS14掘立柱建物(南から)



S09 遺構埋土断面(南から)

写真6 高岡原遺跡調査状況4



遺構掘削状況 (S08竪穴建物: 東から)



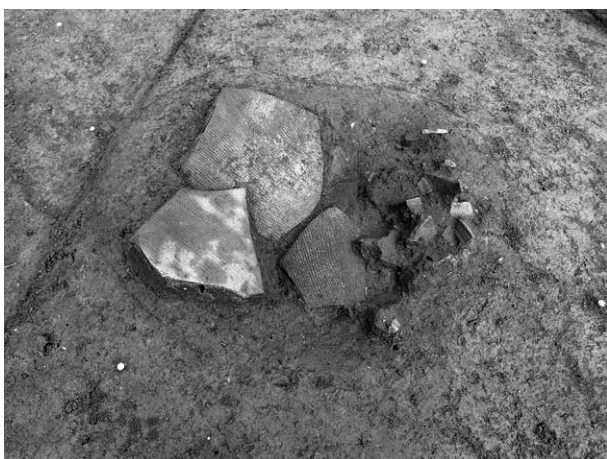
遺構掘削状況 (S08, S09: 南から)



S 14 構成ピットとS09竪穴住居 (南から)



S 14 P1断面 (東から)



S 14 P2遺物出土状況 (南東から)



P24 遺物 (砥石) 出土状況 (南から)

第1表 高岡原遺跡遺物観察表(土器類)

相図番号	報告番号	遺跡名	出土地点	種別	器種	残存部位	法量(cm)			器面調整		色調		胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
6	1	高岡原遺跡	S01	須恵器	坏身	口縁～底部	10.2	122	3.1	ナデ	-	10YR6/2灰白色	0.5～1mmの石英・炭片を含む。1mm角閃石少量含む。	やや不良	坏G 7e前半	
6	2	高岡原遺跡	S01	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	11	122	(3.2)	へら切りナデ 回転ココナデ	回転ココナデ	10YR6/1褐色	1mmの石英・長石粒を多く含む。	良好	坏G 7e前半	
6	3	高岡原遺跡	S01	土師器	坏身	口縁～底部	12	-	(3.8)	回転ココナデ	-	7.5YR6/8褐色	細粒・精良	良好		
6	4	高岡原遺跡	S01	土師器	壘	口縁～胴部	17	-	(4.7)	-	ナナメケズリ	7.5YR6/4にふい黄褐色	0.5～1mmの石英・長石粒を含む。1mm角閃石・雲母少量含む。	普通		
8	5	高岡原遺跡	S02	弥生土器	壘	口縁部	(16)	-	(2.7)	タタキ目 一部ナデ	タテハケ目	10YR6/4浅黄褐色	1mmの石英・長石粒を含む。1mm角閃石少量含む。	良好		
8	6	高岡原遺跡	S02	弥生土器	高杯	胴部	-	16.8	(3.9)	ハケ目	-	7.5YR7/6明黄褐色	1mmの石英・長石粒を含む。1mm角閃石を含む。	良好		
8	7	高岡原遺跡	S02	弥生土器	高杯	杯部～底部	(14)	-	(5.6)	-	-	7.5YR6/8褐色	1～1.5mmの石英・長石粒を含む。	良好	一部に黒斑あり、口縁打ち欠き	
8	8	高岡原遺跡	S02	弥生土器	鉢	完体	12.8	器径3.4	13.8	ナデ ヨコナデ 指頭圧痕	ケズリ 指頭圧痕	7.5YR7/6褐色	1～2mmの石英・長石粒を含む。1～2mm角閃石少量含む。	良好	手づくね形状。植物片圧痕多い、一部に黒斑あり	
10	11	高岡原遺跡	S03	弥生土器	壘	口縁部	-	-	(2.7)	-	-	7.5YR7/6黄褐色	0.5～2mmの石英・長石粒を含む。1mm角閃石少量含む。	良好	体部外面に突帯存在か？	
10	12	高岡原遺跡	S03	弥生土器	高杯	胴部	-	19.4	2.5	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/4にふい黄褐色	1～1.5mmの石英・長石粒を含む。1～2mm角閃石を含む。	良好	胴内部に黒斑あり	
10	13	高岡原遺跡	S03	弥生土器	高杯	胴部	-	脚径7.0	(11)	接合部ナデ付	-	5YR6/6褐色	0.5～3mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母少量含む。	良好		
12	14	高岡原遺跡	S04	須恵器	坏身	底部	-	9.0	(1.3)	ケズリ 底部へら切り ナデ	回転ココナデ ナデ	10YR7/2にふい黄褐色	極細粒砂質。	不良	焼成は酸化的。植物圧痕あり。	
12	15	高岡原遺跡	S04	須恵器	高台付坏	底部	-	122	(2.2)	ヨコナデ ナデ 回転ココナデ	回転ココナデ	2.5Y7/1灰白色	0.5mmの石英・長石を少量含む。細粒の胎土。	やや不良	やや軟質	
12	16	高岡原遺跡	S04	須恵器	坏身	底部	-	7.4	(1.5)	回転ココナデ	回転ココナデ	5YR6/1灰色	1mmの石英・長石粒を少量含む。	不良	軟質、9e	
12	17	高岡原遺跡	S04	須恵器	坏身もしくは碗	口縁～胴部	14	-	(2.8)	回転ココナデ	回転ココナデ	7.5YR6/4にふい黄褐色	やや砂質であるが、胎土は細粒。	普通	高台柄の可能性あり、火輪あり	
12	18	高岡原遺跡	S04	土師器	坏身もしくは碗	底部	-	6.8	(2.0)	-	-	10YR7/8褐色	0.5～3mmの石英・長石を少量含む。0.5mm雲母多く含む。	良好～普通		
12	19	高岡原遺跡	S04	土師器	坏身もしくは碗	口縁～底部	15.4	-	(3.9)	回転ココナデ	-	7.5YR7/6褐色	1～2mmの石英・長石粒を少量含む。	良好		
12	20	高岡原遺跡	S04	土師器	皿	口縁～底部	10.8	9.0	1.2	ナデ	ヨコナデ ナデ	5YR6/6褐色	1mmの石英・長石粒を含む。雲母細片混じる。	普通	底部糸切り	
12	21	高岡原遺跡	S04	須恵器	壘	口縁部	12	-	(2.1)	回転ココナデ	回転ココナデ	10YR6/2灰黄褐色	1mmの石英・長石粒を少量含む。	やや不良	軟質	
12	22	高岡原遺跡	S04	須恵器	瓶	底部	-	19.6	(9.5)	へらケズリ後ナデ	ナデ	10YR6/4浅黄褐色	混料材少ない層かい胎土。	不良	焼成は酸化的。	
12	23	高岡原遺跡	S04	須恵器	長頸壘	胴部	-	器径(13.6)	(6.4)	ヨコナデ 沈線	指頭圧痕	10YR7/3にふい黄褐色	0.5～2mmの石英・長石を少量含む。細粒砂質。	やや不良	内面は酸化的、外面は還元的	
12	24	高岡原遺跡	S04	古代瓦	丸瓦	切縁部	(7.5)	(6.4)	2.1	ナデ 縄目	ケズリ ナデ 布目	10YR4/1褐色	1～2mmの石英・長石粒を含む。砂まじり。	不良		
14	25	高岡原遺跡	S05	弥生土器	壘	口縁～胴部	12.6	-	(8.5)	ヨコナデ タテハケ	ヨコハケ	10YR6/3にふい黄褐色	0.5～2mmの石英・長石を含む。1mm角閃石を含む。	やや不良	丸底壘	
14	26	高岡原遺跡	S05	弥生土器	小型壘	口縁～胴部	11.2	-	(8.7)	-	-	7.5YR6/6褐色	0.5～2mmの石英・長石を多く含む。0.5～1.5mm角閃石多量含む。	やや不良	外部に黒斑あり	
16	28	高岡原遺跡	S06	弥生土器	壘	口縁部	(24.0?)	-	(4.5)	ヨコナデ タタキ	ナナメハケ	7.5YR7/6褐色	0.5～2mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母少量含む。	普通		
16	29	高岡原遺跡	S06	弥生土器	壘	胴部	-	-	(3.0)	-	-	7.5YR7/4にふい黄褐色	0.5mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母少量含む。	普通		

第2表 高岡原遺跡遺物観察表(土器類2)

報告書 番号	遺跡名	出土地点	種別	器種	残存部位	法量(cm)		器面調整		色調		胎土	焼成	備考
						口径	底径	外面	内面	外面	内面			
16	30	高岡原遺跡	S06	弥生土器	口縁部	-	-	ヨコハケ	7.5YR6/6褐色	7.5YR6/6褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母少量含む。	普通		
16	31	高岡原遺跡	S06	弥生土器	胴部	-	-	タテハケ	7.5YR7/4にふいじ褐色	7.5YR7/4にふいじ褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。	良好		
16	32	高岡原遺跡	S06	弥生土器	脚部	-	器底(5.0)	-	7.5YR7/4にふいじ褐色	7.5YR7/4にふいじ褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母少量含む。	普通		
16	33	高岡原遺跡	S06	弥生土器	口縁部	-	-	-	5YR6/4にふいじ褐色	5YR6/4にふいじ褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。1mm角閃石少量含む。	普通		
18	34	高岡原遺跡	S07	弥生土器	胴部	-	-	タテハケ	7.5YR6/6褐色	7.5YR6/6褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。2mm角閃石・0.5mm雲母含む。	普通		
18	35	高岡原遺跡	S07	弥生土器	脚部	-	-	-	2.5YR6/6褐色	2.5YR6/6褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母含む。	普通		
18	36	高岡原遺跡	S07	弥生土器	胴部	-	-	ヨコハケ	10YR7/6明黄褐色	10YR7/6明黄褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。1mm角閃石を含む。	普通		
18	37	高岡原遺跡	S07	弥生土器	脚部突帯	-	-	ヨコナデ	10YR7/6明黄褐色	10YR7/6明黄褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。1mm角閃石少量含む。	普通		
18	38	高岡原遺跡	S07	弥生土器	杯部	-	-	-	10YR8/4黄褐色	10YR8/4黄褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。1mm雲母少量含む。	普通		
18	39	高岡原遺跡	S07	弥生土器	杯部	-	-	-	7.5YR7/6褐色	7.5YR7/6褐色	0.5~1.5mmの石英・長石を多く含む。0.5mm雲母含む。	普通	内部に黒斑あり	
18	40	高岡原遺跡	S07	弥生土器	杯部~脚部接線部	-	-	-	7.5YR7/4にふいじ褐色	7.5YR7/4にふいじ褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母含む。	普通		
20	42	高岡原遺跡	S08	弥生土器	口縁部	-	-	ヨコハケ	7.5YR7/8褐色	7.5YR7/8褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。1mm角閃石を少量含む。	普通		
20	43	高岡原遺跡	S08	弥生土器	脚部	-	10.6	指頭圧痕 ナデ	2.5YR6/6褐色	2.5YR6/6褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。1mm角閃石を少量含む。	やや不良	裾熱か? 脚台内部に黒斑あり。	
20	44	高岡原遺跡	S08	弥生土器	脚部	-	8.2	-	10YR6/3にふいじ黄褐色	10YR7/4にふいじ黄褐色	0.5~2mmの石英・長石を多く含む。1.5mm角閃石を少量含む。	普通	外側に一部黒斑あり	
20	45	高岡原遺跡	S08	弥生土器	脚部	-	(10.0)	-	10YR8/4黄褐色	10YR8/4黄褐色	0.5~2mmの石英・長石・岩片を含む。1mm角閃石を少量含む。	良好		
22	46	高岡原遺跡	S09	弥生土器	口縁部	-	12.6	ヨコナデ	7.5YR6/3にふいじ褐色	7.5YR6/8褐色	0.5~4mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母多く含む。	普通	裾熱か?	
22	47	高岡原遺跡	S09	弥生土器	口縁~胴部	13.5	-	ヨコナデ	10YR8/6黄褐色	10YR8/6黄褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。1mm雲母含む。	普通		
22	48	高岡原遺跡	S09	弥生土器	底部	-	器底(14.2)	-	7.5YR4/4褐色	2.5YR6/6明赤褐色	0.5~1mmの石英・長石を含む。0.5mm角閃石・雲母小片混。	良好	底部裾熱	
22	49	高岡原遺跡	S09	弥生土器	口縁~胴部	12.6	-	-	7.5YR6/4にふいじ褐色	7.5YR6/4褐色	0.5~3mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母少量含む。	やや不良	一部に黒斑あり。丸底甕	
22	50	高岡原遺跡	S09	弥生土器	口縁~胴部	14.4	-	ナナメハケ	7.5YR6/6褐色	7.5YR6/6褐色	0.5~1.5mmの石英・長石を含む。1~2mm角閃石・雲母小片含む。	良好	直口甕	
22	51	高岡原遺跡	S09	弥生土器	口縁部	(26.0)	-	ヨコハケ	5YR7/6褐色	5YR7/6褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。1mm角閃石を少量含む。	良好		
22	52	高岡原遺跡	S09	弥生土器	頸部	-	器底(12.2)	ナデ ナナメハケ	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	0.5~4mmの石英・長石を含む。1mm雲母含む。	良好		
22	54	高岡原遺跡	S09	弥生土器	脚部	-	20.0	ナデ ナナメハケ	5YR7/6褐色	5YR6/6褐色	0.5~3mmの石英・長石を含む。1.5mm角閃石・雲母小片含む。	良好	透穴2個1対	

第3表 高岡原遺跡遺物観察表(土器類3)

報告書 番号	相図 番号	遺跡名	出土地点	種別	器種	残存部位	法量(cm)		器高	器面調整			色調		胎土	焼成	備考
							口径	底径		外面	内面	外面	内面				
22	55	高岡原遺跡	S09	弥生土器	高坏	脚部	-	脚径4.0	(4.5)	夕ナナ子	夕ナナ子	5YR7/8褐色	7.5YR7/6褐色	細粒、精良。	良好	内面一部に黒斑あり	
22	56	高岡原遺跡	S09	弥生土器	鉢	口縁~脚部	7.6	口径φ2	(6.8)	ハケ ヨコナ子 ナ子 指頭圧痕	ヨコナ子 ナ子	2.5YR4/8赤褐色	2.5YR4/6赤褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。0.5mm角四石少、雲母小片多。	良好		
22	57	高岡原遺跡	S09	弥生土器	手づかみ小鉢	口縁部	(9.0)	-	4.2	指頭圧痕	型抜き?	10YR8/4浅黄褐色	7.5YR8/4浅黄褐色	0.5~1mmの石英・長石を含む。1mm角四石含む。	良好	外側に一部黒斑あり	
22	58	高岡原遺跡	S09	弥生土器	鉢	口縁~脚部	(15.0)	-	(4.4)	指頭圧痕	ナ子 ヨコハケ ナ子	5YR6/8褐色	7.5YR6/8褐色	0.5~1mmの石英・長石を含む。1mm角四多	良好		
25	59	高岡原遺跡	S14 P2	須恵器	坏身	口縁~底部	11.0	-	(2.8)	回転ヨコナ子	回転ヨコナ子	2.5Y7/3浅黄褐色	2.5Y7/2灰黄色	0.5~2mmの石英・長石を含む。1~5mm角片含む。	不良	植物圧痕多い	
25	60	高岡原遺跡	S14 P2	須恵器	坏身	口縁~底部	12	6.2	3.2	回転ヨコナ子 底部へラ切痕ヨコナ子	回転ヨコナ子	2.5Y6/1黄灰色	2.5Y6/1黄灰色	0.5~1mmの石英・長石少量含む。細粒砂質。	普通	やや軟質	
25	61	高岡原遺跡	S14 P2	須恵器	坏身	口縁部	5.5	-	(2.8)	回転ヨコナ子	回転ヨコナ子	10YR7/2にふい、黄褐色	2.5Y7/2灰黄色	胎土精良。0.5mm雲母含む。	不良	やや酸化的焼成	
25	62	高岡原遺跡	S14 P2	須恵器	坏身	口縁部	10.0	-	(1.9)	回転ヨコナ子	回転ヨコナ子	2.5Y7/1灰白色	2.5Y7/1灰白色	0.5~1mmの石英・長石を含む。	不良	植物圧痕多い	
25	63	高岡原遺跡	S14 P1	須恵器	坏	口縁部	12.4	-	(2.5)	-	回転ヨコナ子	7.5YR7/6褐色	7.5YR7/6褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。	良好		
25	64	高岡原遺跡	S14 P1	須恵器	高台付坏	底部	-	高台径7.2	(1.5)	-	-	10YR7/2にふい、黄褐色	5Y7/2灰白色	0.5~1mmの石英・長石少量含む。極細粒砂質。	不良	軟質、植物圧痕多い	
25	65	高岡原遺跡	S14 P2	須恵器	皿	口縁~底部	10.8	8.2	1.0	回転ヨコナ子	-	2.5Y7/2灰黄色	2.5Y7/2灰黄色	極細粒砂質。雲母小片混入。	不良	軟質	
25	66	高岡原遺跡	S14 P2	須恵器	壺	底部	-	-	(1.2)	-	回転ヨコナ子	10YR7/2にふい、黄褐色	2.5Y6/1黄灰色	0.5~1.5mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母含む。	不良	軟質	
25	67	高岡原遺跡	S14 P2	土師器	高台碗	底部	-	8.6	2.7	回転ヨコナ子 ケズリ ヨコナ子	回転ヨコナ子	5YR7/3にふい、黄褐色	10YR7/3にふい、黄褐色	0.5~2mmの石英・長石・岩片を含む。2mm角四石少、雲母小片含む。	良好	底部に植物圧痕あり	
25	68	高岡原遺跡	S14 P2	黒色土器A	坏身	底部	-	6.4	(1.8)	ケズリ 底部へラ切 ナ子	黒化後ヨコナ子	10YR3/1黒褐色	10YR7/4にふい、黄褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。雲母小片を含む。	良好	底部一部に黒斑あり、内面に雲母小片多い。	
25	69	高岡原遺跡	S14 P2	黒色土器A	碗	底部	-	8.6	(1.6)	ナ子	黒化	2.5Y3/1黒褐色	2.5Y5/4黄褐色	0.5~1mmの石英・長石少量含む。雲母小片を多く含む。	不良	内面に雲母小片多い。	
25	70	高岡原遺跡	S14 P2	黒色土器A	碗	胴部	-	-	(2.5)	ケズリ	黒化後ヨコナ子	10YR3/1黒褐色	10YR7/4にふい、黄褐色	0.5~2mmの石英・長石を含む。雲母小片を含む。	良好	底部一部に黒斑あり、内面に雲母小片多い。	
25	71	高岡原遺跡	S14 P2	黒色土器A	碗	口縁部	-	-	(3.5)	回転ヨコナ子	回転ヨコナ子	7.5YR1/7/黒色	7.5YR6/4浅黄褐色	0.5~1mmの石英・長石を含む。0.5mm雲母	良好	外面に植物圧痕	
25	72	高岡原遺跡	S14 P1	須恵器	鉢	口縁~底部	15.6	8.6	7.3	回転ヨコナ子 ケズリ 底部へラ切	回転ヨコナ子 ナ子	10YR6/2灰黄褐色	2.5Y6/1黄灰色	0.5mmの石英・長石を少量含む。雲母小片を少量含む。	良好	硬質、外側に火傷あり。	
25	73	高岡原遺跡	S14 P2	須恵器	大甕	口縁~脚部	45.8	(80.2)	(26.7)	ケズリ 同心円当て具痕 ナ子 格子目ケズリ	ナ子 平行当て具痕	7.5Y4/1灰白色	7.5Y7/1灰白色	1mmの石英・長石少量を含む。	良好	体部に重ね焼痕(坏?)あり	

第4表 高岡原遺跡遺物観察表(石器類)

相図 番号	遺跡名	出土地点	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
8	高岡原遺跡	S 02	縦長削片	3.3	1.7	0.65	3	黒曜石	2線に使用痕、石打か?
8	高岡原遺跡	S 02	石匙	(3.6)	2.1	(0.7)	5	黒曜石	先端部欠損
18	高岡原遺跡	S 02	台石	20.0	11.9	11.0	2575	中粒砂岩	1面使用(溝痕あり)、使用面縁部に敲打痕あり。
27	高岡原遺跡	P 24	底石	(16.5)	16.0	3.8	1735	細粒平行集理砂岩	4面使用

# 報告書抄録

ふりがな	たかおかぼるいせき							
書名	高岡原遺跡Ⅱ							
副書名	玉名市山田における分譲地進入路造成工事に伴う文化財調査報告書							
シリーズ名	玉名市文化財調査報告							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	田熊秀幸 菊池直樹							
編集機関	玉名市教育委員会							
所在地	〒869-8501 熊本県玉名市岩崎163							
発行年月日	2019年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
たかおかぼるいせき 高岡原遺跡	たまなし 玉名市 やまだ 山田 あきたかおかぼる 字高岡原	43206	256	32°56'15"	130°32'39"	平成30年1月30日 ～ 平成30年2月22日	287 m <sup>2</sup>	分譲地進入 路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
高岡原遺跡	集落	弥生(後期) ～古墳(初頭)		竪穴住居・土坑		弥生土器・石器		
	集落	古墳(後期)		竈付竪穴住居		須恵器・土師器		
	集落	古代		掘立柱建物・溝		須恵器・土師器・黒色土器・瓦		

玉名市文化財調査報告 第43集	
<b>高岡原遺跡Ⅱ</b>	
玉名市山田における分譲地進入路造成工事に伴う文化財調査報告書	
平成31年3月22日印刷 平成31年3月27日発行	
編集発行	玉名市教育委員会 〒865-8501 熊本県玉名市岩崎163
印刷	株式会社 有明印刷 〒865-0022 熊本県玉名市寺田123-1